

寄稿

第九・音楽祭回想

江見恭彦



津山文化センターは昭和 41 年に竣工開館し、それ以後県北の学術、芸術、文化事業の拠点として大きな役割を果たしてきました。

津山市民音楽祭も毎年津山文化センターで開催されるようになりましたが、集まる音楽仲間合言葉は「ベートーヴェンの第九を演奏してみたい」ということでした。しかし第九はベートーヴェンの交響曲のなかでも最高傑作と言われ、スコア（総譜）をみても高度の技術が要求され、合唱の音域も広く到底手がつけられない大曲でした。

その時、日本フィルハーモニー交響楽団の創設指揮者であり、日本を代表する指揮者・渡邊暁雄先生が作陽音楽大学の音楽部長として赴任して来られました。第九の話聞かれ「私が指揮をしよう」ということになりました。

昭和 58 年 3 月に「津山第九をうたう会」が結成され、公募の合唱団と津山市民オーケストラがこの大曲に挑むことになりました。合唱団員も 120 名集まり、高音域と跳躍進行の多い旋律に戸惑いながら練習を重ねていきました。またオーケストラにも音大の先生方がはいり、昭和 58 年 12 月 8 日第 1 回演奏会を開催する運びとなりました。

ソリスト 4 名も日本のトップ歌手を招聘し、渡邊暁雄先生指揮で 80 名の市民オーケストラと 120 名の合唱団による演奏開始であります。第 1 楽章の不安な鳴動からはじまり、2 楽章、3 楽章の迫力ある演奏が展開され、終楽章にはいり歓喜の歌で曲が終結すると、通路までいっぱいの満席の客席から大きな感動とどよめきが沸き起こり、万雷の拍手はいつまでも鳴り止みませんでした。

この第九演奏会が毎年 12 月に開催されて盛り上がっていくなか、「津山国際総合音楽祭」の話が持ち上がりました。そして渡邊暁雄先生を音楽監督とし音楽祭を開催していくことに決まりました。

「未来に架ける人の輪・音の輪」をテーマとし、テーマ作曲家にグスタフ・マーラーを掲げました。マーラーはロマン派後期の作曲家ですが、ロマン派の枠から脱却し創造的多層的音楽を作り上げた人であると言われており、その作風が音楽都市として飛躍を目指す津山に適していると考えられたのです。

第 1 回津山国際総合音楽祭は昭和 62 年 9 月 19 日から 5 日間の日程で開催されました。音楽祭のプログラム内容は豪華で多彩、他に類を見ないような立派なものでした。音楽学者によるシンポジウムや講演会が開催され、とくに「なぜ今、マーラーか」などが論ぜられました。

管弦楽も NHK 交響楽団による「大地の歌」= マーラー作曲、広島交響楽団・九州交響楽団による交響曲第 2 番「復活」= マーラー作曲（この演奏は津山総合体育館で行われました）。

その他作陽音大交響楽団も出場し華やかな演奏が繰り広げられました。日本音楽では箏曲と尺八、ポピュラー音楽ではジャズコンサートなどあらゆるジャンルの演奏が行われ、津山の町も音楽祭一色に染められてしまいました。



▲ ありし日の渡邊暁雄先生

以来テーマ作曲家は一貫してマーラーを掲げ、2007 年の第 7 回音楽祭でマーラーの交響曲 10 曲を、演奏し終えました。人口 10 万人の小都市での全曲演奏は他に例がなく日本の音楽界から注目を浴びています。これを機にマーラーの音楽に理解を深められた市民の方も多いと思います。

この音楽祭を通して一番印象に残っているのはヴァイオリニストの神尾真由子さんです。小学 4 年生の時、全日本学生音楽コンクールで優勝したという話を聞き（祖母は津山出身）第 5 回音楽祭に特別ゲストとして招聘しました。中学 1 年生のまだあどけない少女でしたが、京都市交響楽団をバックにメンデルスゾーンの協奏曲を見事なボーイングで演奏披露しました。その後、チャイコフスキー国際音楽コンクールで優勝し国際的に活躍するミュージシャンになりました。この成長ぶりは津山国際総合音楽祭の誇りであります。

また、世界的作曲家として活躍されていた故・武満徹先生にも接する機会がありお話を伺いました。独学で作曲法を勉強された方ですが「作曲で一番大切なのはオーケストレーションである。そして美しい音と響きを求めなくてはならない」と言われたのが印象的でした。（マーラーも同じことを言っています）

再来年は第 10 回津山国際総合音楽祭が開催されることになっています。地方創生も叫ばれているなかです。この津山国際総合音楽祭と津山第九演奏会がいつまでも続き、津山が音楽都市、文化都市として大きく躍進していくことを念願しております。

【江見恭彦略歴】津山第九をうたう会初代会長、現・顧問。津山国際総合音楽祭プログラム委員（クラシック部会長）を歴任。